特集

新潟大学への想い ～旅立ちの日に～

退任する教授からメッセージ

長年にわたってさまざまな研究を行い、学生たちに多くを教えてきた先生方。
今年退任される先生方に、新潟大学への想いを語っていただきました。

退任に際して

■教育人間科学部教授
鈴木　郁夫

新潟大学に赴任することが決定して、新潟市旭町通の教育学部に挨拶に来たのが1970年2月25日であった。自然地理学（地形学）を専攻しているにもかかわらず、新潟県はすべて豪雪地域であると思っていたので、当日は長靴を履いていかなければならないかと考え、新津出身の同級生に聞いたところ、新潟市は普通の靴でも大丈夫とのことであった。あれから早いもので36年間が経過したことになる。自分の調査に加えて、長期の海外調査、共同調査、委託調査などもあって、年に60～120日間も外に出ていたせいか、あっという間に年月が過ぎ去ったというのが実感である。赴任するまで、私にとって新潟県は未知の地域であったが、現国土交通省の土地分類基本調査（1973～2005年）、尾瀬総合学術調査（1993～1998年）などに関わったので、県内のほとんどの地域に行くことができ、多様な自然に触れることができた。

赴任当時はまだ全国の学生運動の名残が見られ、事務室の真上の2階にあった研究室の窓は、学生の投石によってほとんど破壊され、ベニヤ板で補修されていた。当時は学生とそれほど年齢差もないので、いろいろなことでよく議論をしたが、そのうちに年齢差が大きくなり、共通一次、センター試験が行われ、とくに平成になってからは学生気質も激変したためか本質的な議論はほとんどなくなった。ただし、研究室所属の学生諸君とは新潟県だけでなく、日本の各地に野外実習で長期間出かけたりしたので、親しく話をすることができた。夏休み期間を利用しての約1週間の調査は、一昨年まで35年間も継続したので、中部地方以北の多くの地域を知ることになり、炎天下でのそれぞれの調査はつらく、その後の報告書の指導も大変であったが、今はそれらが楽しい思い出となっている。

教育学部は新潟・長岡・高田の統合、引き続いての大学院設置、学部再編（教育人間科学部）、さらに独法化など存亡にかかわる非常に大きな問題に対処してきた。新潟大学はこれからも多くの試練に立ち向かわなくてはならないと考えられるが、魅力ある大学として飛躍して欲しい。

最後に、在職中ご指導、ご支援を賜りました教職員、学生の皆さんに深く感謝し、新潟大学の発展を祈念します。長い間、ありがとうございました。

善光地震の痕跡

大学変革の流れの中で

■教育人間科学部教授
竹田　信彰

「思い出」を記す時よく聞く言葉は、「この期間は、長くもあり、短くもあった」という言葉である。いざ自分の番が来てみると、やはり実感となって感じられる。

昭和41年4月、旧教育学部高田分校に着任して以来、気が付くとこの3月で退任を迎えることになった。40年は長くも又短くもあったということか。

最初の数年間は教育と研究に無我夢中であったが、そのうちに大学の自治をめぐって、大学と学生間で大きな論争が起こり、終日激しい議論が展開され、授業も成立しない日々が続いた。今思い出してみてもあの紛争が何か新しいものを残したのか疑問が残る。

次に強く残る思い出は、教育学部が新潟、長岡、高田の三地区にあり、これを統合する問題であった。三地区の主張は激しく衝突し、現在の新潟に統合される点に用した時間と労力を思う時、とても感慨深いものがある。

次に心に残るのは、大学院設立の準備であった。学部教育だけでは優れた教員養成は不十分ということで、最初二年課程の大学院の計画が行われ、連日新カリキュラムの原案作りと修正がくり返される日々が続いた。

最後に経験した大きな変化は、独立法人化への大学の移行であった。これから先も大学は多くの変化を続けるのは当然であろう。しかし願いたいのは、それが大学、教員、学生にとって内容豊かなものになってほしいことである。

新潟大学の未来を信じつつ

■教育人間科学部教授
荻野　敏夫

新潟大学には三分の一世紀もの長き間お世話になりました。着任したのは教育学部長岡分校、昭和48年でした。当時教育学部は三つの分校に分かれており、長岡分校は中でも最も規模が小さく、戦後の横浜で焼け跡に建てられた小学校のバラック校舎を経験した身にも、古い木造2階建ての校舎を初めて見たときは正直驚きました。一般教養科目2コマと専門講義2コマ（1コマは新潟校で）、それに学生実験2コマをすべて通年で担当し、もちろん研究環境など良かろうはずはないのですが、不思議に閉塞感のない日々でした。今から思えばちょうど高度成長の加速期でもあり、大学も行政もとにかく教育・研究環境を良くしようと言う姿勢があったのを感じていたためかも知れません。授業は戦前の全体主義の反省から教員一人一人が主体的で創造力のある専門職としての力が必要ということで、教員養成課程ではあるが他の理系学部と変わらないレベルで専門中心にやってくださいと言うのが主事や先輩教員のアドバイスでした。また、学生も他学部に負けないように専門分野を修めたいという気風があったように思います。昭和56年に念願の学部統合が実現し、五十嵐地区で他学部の先生方の協力、支援も得られるようになり、実に恵まれた環境が整いました。おかげさまで化学の研究も自分なりに進めることも出来、 無事今日まで充実した日々を過ごすことが出来ました。

着任当時はほとんど無限とも思えた歳月も、過ぎてしまえばまことあっけなく為さざる業も多く残る想いもありますが、大きく旋回している時代の変わり目にあって新潟大学の未来を信じつつお別れしたいと思います。

新潟大学への想い
～旅立ちの日に～

退任にあたって

■教育人間科学部教授
岡野　崇彦

1979年教養部に着任し、その後1994年に教育学部に移籍、1998年学部改組に伴って、教養部から移った体育教員中心に健康スポーツ科学課程が発足するまでは、専ら教養教育（現Gコード科目）の体育科目を担当してきました。

1998年から始まった健康スポーツ科学課程学生の教育研究指導は、新課程の発足に伴う苦労があったものの、周囲の若いエネルギーに揉まれながらの、あっという間の時間でした。

永く担当してきた教養教育体育科目の授業においては、「生涯において心身の健康に責任を持つ」をテーマに、いろいろな学部のフレッシュマンと共に身体を動かしながら「身体･健康･スポーツ」等について語ってきました。受講生の声に「もっと自由にスポーツをやりたい」がありました。ならば各自の自由時間にスポーツを行えばと勧めましたが、そのスポーツ環境やプログラムはというと、学内では残念ながら不十分と言わざるをえません。

健康スポーツ科学課程の発足に伴う、高いスポーツ技能を持った入学者の活躍は、幾つかの部活動の活躍に現れているようです。しかしさらなる活躍をねらって練習時間、場所の確保となると、現在の大学のスポーツ環境は、スペースや時間等の増に厳しいものがあります。

地域スポーツ支援論の講義で、「大学スポーツが地域社会にどのように貢献できるか」を、学生と共に考えてきました。学生が近隣の小中学生のスポーツ指導、交流等に出向く具体的な活動もあり、これらの活動がより発展することを念じています。

スポーツのある豊かな社会づくりのために、地域社会とも連携した大学のスポーツ環境を素晴らしいものに整備したい、と思いつつ今日を迎えてしまいました。次は、地域住民の一人として大学のスポーツと交流させていただきたいと思っています。お世話になりました皆様、ありがとうございました。

新潟大学を退任するにあたっての思い

■経済学部教授
川村　宣元

昭和50年、前任校の東海大学から新潟大学への赴任がきまったときには、周囲から「あんなに雪深いところに行くの？」と心配されたものだった。ところがいざ住み始めて見ると、海岸の新潟市は雪も少なく、そのうえ米はよし、酒はよし、魚はよしで3拍子揃って、酒好きの私には願ってもないところであった。だから個人的には快適にかつ満足しながら過ごすことができた。ただ大学自体には大きな変化があった。最近の法人化はもちろんであるが、私にとっては平成6年の教養部解体のほうが大きな出来事である。なにしろ私はドイツ語教師として教養部に赴任したのである。それが20年目にして突如教養部がなくなり、同僚たちはいろいろな学部に分属し、私も経済学部に配属となった。それまでと同じく教養部のドイツ語を担当するとともに、なんらかの専門科目を担当すべしとのことで、私は新設の「異文化コミュニケーション論」なる講義科目（半期）を担当することになった。私の専門であるドイツ語学と異文化とは無関係とは言えないが、専門外のことでもあり、最初の年には講義の準備で大変だったことを思い出す。なんとか無事にやってこられたのも経済学部でも良い同僚たちにめぐまれたおかげと感謝している。ただこのごろときどき、教養部をなくして大学にとってどんないいことがあったのだろうかなどと考えては、教養部時代のことが懐かしくなるのは、やはり年のせいなのだろうか。

定年退職を迎えて

■経済学部教授
佐藤　正

私は昭和47(1972)年に新潟大学併設商業短期大学部（商短）に採用になり、平成6（1994)年に商短の経済学部･法学部の夜間主コースへの改組に際して、経済学部に移ってきました。商短は、勤労者のための夜間の教育機関であり、かつては高卒就職者が昼間の勤務の傍ら夜間勉学に励む場として盛況でしたが、わが国の経済の発展とともに4年生学部志向が高まる中で、両学部の夜間主コースとして4年制課程に改組されました。以来、はや12年が経過し、高校からの昼間大学進学率が一層上昇したこともあり、夜間主コースの存在意義が小さくなっているような受け止め方が一部にあるようですが、生涯学習の場として不可欠であることを再認識する必要があると思います。小･中･高校･大学へと続く進学競争のコースから何らかの理由で外れてしまったものに再挑戦の機会を与えてくれる場として不可欠であり、直面している高齢化･人口減少社会の中で、中堅社員に能力の再構築の機会を、熟年者に知的好奇心を満たす機会を与えてくれる場としてますます必要となるのであり、これを担うことは国立大学法人である新潟大学が社会に対して果たすべき任務の一つであると思います。夜間主コースの運営が新潟大学全体の社会に対する責任として再認識され、全学的な支援のもとで、一層充実した内容で運営されていくことを期待してやみません。

新潟大学を退任するにあたっての思い

■医学部保健学科教授
池田　京子

看護職としての臨床に終止符を打ち、教育の世界に入ったのが新潟大学医療技術短期大学部でした。看護教育期間は、他大学の4年間を含め15年になります。生まれも育ちも上越市で、雪深い冬を嫌い東京で学び就職しました。しかし、目まぐるしい情報の渦に翻弄される日々に疲れ、静かに学問をしたいと故郷に戻ってきました。新潟大学に赴任して最初に目にとまったのが中田瑞穂先生の「学問の静かに雪の降るは好き」でした。以来、座右の句として大切にしています。静かに学問の世界に浸りたいと願う私に、現実は厳しく容赦しませんでした。短期大学部から医学部保健学科に改組し、休むことなく大学院保健学研究科（修士課程）の設置準備と開設、1回生の入学･卒業と翻弄された11年間でした。

今、退任にあたり思うことは、苦しいこともありましたが、それを糧に多くのことを学ぶことが出来たことに感謝しています。その道に長けた人材豊富な総合大学で教育の基本を学び、看護教育の未熟さを実感しながらも将来の課題が見えてきました。4月から終章となる第3の職場で、看護学の集大成をして仕事人生にピリオドを打ちたいと考えています。

最後に新潟大学のさらなる発展を祈り筆を置くことにします。短かくも長くもあった新潟大学に、別れ告げることに一抹の寂しさがあります。ありがとうございました。

新潟大学への想い
～旅立ちの日に～

今を大切に生きる

■医学部保健学科教授
藤野　邦夫

10年前の体験が現在の自分にとって貴重なこともあれば、過去の経験や価値観が時代の変化で、新たな発想が必要なこともある。40歳以上年齢差が開いた若い学生と話しをしているとそのずれをよく感じる。ある日、学生にガリ版刷りの古い統計資料を見せることになった。コピー機やワープロが日常生活の中に浸透しており、ガリ版刷りとは何かさえ知らなかった。

新潟は、水害、地震、豪雪と自然災害続きである。おまけに広域停電さえ起こった。便利さと豊かさに慣れた若者は、危機管理に弱いのではと感じる。

私は古い人間だが、新しもの好きで秋葉原の電気街へはよく行く、街は若者が多く活気に満ち、多様な新製品が並んでいる。アマチュア無線の店がパソコンショップになり、ゲームソフト専門店に変化していく。4月から東京に住むが、暮れに110度BS･CS受信用のアンテナを揚げ、パソコンと接続可能な32インチ地上波デジタル対応の液晶テレビを買った。新潟の家には既に光ケーブルを引きインターネットは高速でIP電話もある。

単なる珍しい物好きでは困るが、スポーツ、読書、演劇、旅行などその人の価値観にあった「今を大切に生きる」ことが幸福なのだろう。

創造性を大切に

■工学部教授
斉藤　義明

大学の使命は教育と研究（近年は管理運営、社会貢献も入るが）であり、知識の伝承と共に新しい知識を追加する業務が重要である。資源が極端に少ない日本はこれからはアイデアで勝負する必要がある。

私自身多くの特許を大学に寄付し、新潟大学で最も沢山大学所有の特許を取得している。

その経験からすると、独創性は自然に身に付くものでも無ければ、天才と言われる人たちだけの特権でもないと思う。過去の大発明家の手法を分析すると幾つかのパターンがあることに気付く。これらの手法をいつも頭の中に入れて研究を行っていくと確かに創造性を活発にするのに効果がある。ただ、これだけでは駄目で、日頃から広い分野の知識を吸収し、整理し、いつでも活用できるようにしておくことも大切である。

社会的にニーズの高い或いはこれからニーズが高まって行くと考えられる「もの」、「事柄」、「現象」、「問題」等に対する解決策を見出そうと日頃考えていると、ある時、自分でも思いもよらなかった発明が可能になる。私の最近の発明は、以下のような方法である。情報化社会が秘密情報を簡単に解読する高速計算機を作り出し、社会がパニックに陥ることが予想される。この時、最も解読され難い手法の実現方法を編み出した。もしかすると大ブレークするかも知れない。

皆さんも楽しみながら学問を進め、成果を特許で世に問うてみては如何であろうか。

実験中の筆者

農学部を退職するにあたって

■農学部教授
伊東　睦泰

1968年、新設された畜産学科草地学教室に助手として赴任、以来、大学紛争、五十嵐への移転、総合大学院の設立、学部改組等々、さまざまな出来事が続き、社会も変りました。多くの学生を迎えて教え、共に学び、社会に送り、「アッ」という間に38年が過ぎていよいよ3月には退職です。専門分野では、家畜の飼料生産の場である「草地の密度維持機構」の解明に多くの学生･院生共々、実際のフィールドや実験圃場、或いは実験室で汗水を流してきました。山積みされた古い野帖を整理しながら、地味で多労な調査の連続に、その時々の専攻生諸君がよく従ってきてくれたことと、改めて感謝しているところです。

今、上辺だけの「勝ち組」が大きな顔で世の中を牛耳り、「負け組」をコケにするという風潮が蔓延しています。大学でさえ、トピック性と即効性がもてはやされ、最近は「中つり広告」の見出しになりかねない出来事も聞きます。じっくり本を読んで思索する雰囲気、根気よく自然を観察する余裕、筋道の通った議論を行う習慣が失われているように感じます。でも、本当の社会の発展、科学の進歩は、本質を究めた「実」のある蓄積の上にたって初めて可能であることに変わりはありません。何より大学は自由な雰囲気で地道に真理を求めてこそ価値があるところです。若い学生諸君には、目先の軽薄な動きに惑わされることなく、物事を深く学んで未来を見通す力をつけていただきたいと希望します。

新潟大学への想い
～旅立ちの日に～

新潟大学を退職するにあたっての思い

■農学部教授
山本　仁志

昭和39年に新潟大学農学部林学科を卒業すると共に林学科運材工学教室にお世話になり、その後、今日まで約40年間お世話になりました。

この間、新潟地震、学科増設、農学部五号館火災、東大安田講堂に象徴される60年安保反対から大学紛争、新潟大学本部占拠、農学部本館占拠、五十嵐移転と社会情勢の変化から林学科の講座改組、学科改組、大学院改組、農場建物新築、演習林苗畑及び宿舎移転、そして2004年JABEE認定、教育･研究の発展のために古い殻から脱皮を繰り返し時代と共に今日に至っています。

このような中にあって、古いものをぶち壊し、新しく構築されたものには、新しさと斬新さが光輝きます。しかし、古いものには過去に蓄積された重厚な、いぶし銀のようなものが感じられます。猪突猛進し、変化を求めることも時代の流れかも知れませんが、時には、立ち止まり「温故知新」の言葉を思い起こすことが必要かと思います。

40数年間導いて下さった多くの諸先生方、卒業生･学生の皆様方の助けと支えによって今日を迎えられることに、感謝の念で一杯です。ありがとうございました。

皆様の今後の益々の発展をお祈り申し上げます。

退任にあたって

■農学部
（附属フィールド科学教育研究センター）教授
伊藤　道秋

1985年の春、北大農学部から農学部附属農場に着任し、以来21年になりました。キャンパスから40kmほど離れた村松が勤務地で、講義や会議には約1時間をかけて車を走らせます。時間のロスは悔しいけれど、解決方法がありません。移動に使うマイカーのメーターはどんどん回り、私的利用を含め、年間2万5千キロが平均的な走行距離で、今までに地球を何回りしたことかと考えたりします。何台もの車を乗りつぶし、地球温暖化に手を貸しながらの燃料消費にも、一切大学は経費的な支援はしてくれずじまいでした。この不遇の解決策もないまま、後任者に引き継がなければならないやりきれなさがあります。幸い、農場という教育研究環境で、学生と共に汗を流した実習は身体の疲れと反比例して快適で、身近な作物の生長や収穫の喜び、のどかに育む家畜たちの動きは大いに活力を与えてくれ、悪条件に落ち込むのを引き戻してくれました。現場にはフィールド研究を進めるのに相応しい多くの課題があり、目的を持った研究に取り組めたと考えています。全国の大学農場の連携は、研究連携においても成果を生み財産です。2001年改組で、農場教員が担う専修コースが誕生し、専攻学生の教育に苦心しながらも地域に根ざした研究を一緒に出来る喜びは大きいと言えます。今春、2期生と共に無事退任できる喜びを噛みしめながら、この地域総合農学コースが、新潟大学と共に益々発展することを願っております。

あっと言う間の5年間

■理学部教授
中井　武

先生方や学生達と楽しい日々を過ごせたことに感謝。

短かくも実に楽しい新潟大での5年弱でした。5年前、東京工業大学定年の直前に、思いかけず新潟大からオファーをいただき、その年の8月に赴任しました。一年目は、計画ずみの5件の海外出張で殆ど不在でしたが、2年目には新築の物質生産棟に移り、研究室造りを始めました。以来、東工大の時よりもきれいで安全な研究室で、卒研生や大学院生らとともに有機合成化学の研究をやってきました。3年目の秋にはカナダ留学中の田山君が助手として加わっていただき、研究活動もより活発になってきました。こうして研究室整備も仕上がった頃に定年を迎え、やや名残惜しい気がするこの頃です。

この間、学部と大学院では有機化学を、他学部の一年生には入門有機化学を講義してきました。大学生の学力がよく議論される昨今、本学の学生諸君の中には、資質の高い学生が比較的多いという印象です。ただ、真面目だけれども少々おとなしく自己表現の苦手な学生が多い感じもします。今後、優秀な学生が本学大学院で成長して、社会のリーダーとなってくれるものと楽しみにしています。

赴任中に本学も法人化されて、いろんな変化が一挙に起き、元々複雑であった学部／大学院組織や意志決定プロセスが益々複雑となり、今でもとまどうことが多い状態です。最近の学長選挙の混乱も、法人化への道遠しの感がします。早く小異を捨てて、全学をあげて法人化を実のあるものにしてほしいと願うばかりです。

ご挨拶

■大学院医歯学総合研究科教授
板東　武彦

新潟大学教授を定年退職となり、大学院博士課程に入学以来、約40年間の研究生活に区切りがつきます。新潟大学には、半分の20年近く在職しました。新潟は食べ物も良く人情も厚く住みやすいところであり、医学部には学問を好む雰囲気がありました。その中で、前半は動物実験を中心に立体視の基礎である「輻輳眼球運動やピント調節の大脳機構」を研究し、後半10年は脳機能イメージング･自律神経研究を含み「人間についての応用研究」に踏み込み、企業と共同で活動したり、国際標準の策定に参画したりしました。学術的業績の評価は後世に任せるとして、本人は満足しています。

教育面でも、医学部は進化の激しいところで、何度かの抜本的なカリキュラム改訂とともに、新教育法を次々と取り入れ、FDもほぼ全教員が受けています。学生教員懇話会などを通じた肌理の細かい指導やカウンセリングについても組織をあげて行われています。その中で、大学院学生の指導も含めると、首まで教育研究に浸って立ち働いていた頃が、懐かしくまた、楽しい想い出となっています。教授を定年退職することを機会に振り返りますと、ありふれた感想ではありますが、社会や友人に生かされてきたという感じが深くなります。数々のご支援に値する活動ができたかどうか不安が大きいのですが、この区切りを機会に改めて皆様に感謝したいと思います。

新潟大学への想い
～旅立ちの日に～

同じ釜の飯を喰う解剖学実習とマクロ解剖夏期セミナー

■大学院医歯学総合研究科教授
熊木　克治

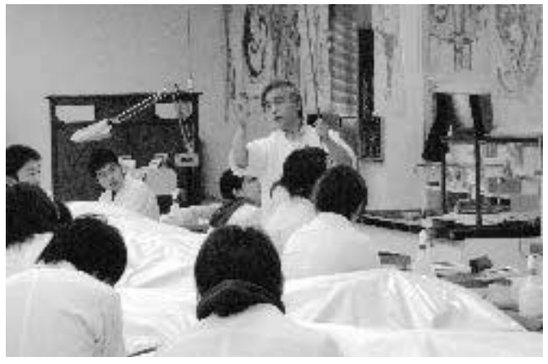
医学部において、昭和56(1981)年6月から25年9か月、26回の解剖学実習を担当した。科学するということは正確な「観察」に基づく“所見”が基本となる。標準と変異の所見に基づき頭を使って考える「考察」によって形態形成の“物語”すなわち「原則」を発見できる喜びを目指した。レポートを課し小研究を試み、実習は毎年多くの成果を挙げることができた。教育と研究の一致を実践した。今流行のPBL, EBM, チュートリアル, 自己学習などは、いわゆる解剖学実習として以前からすでに実践してきたことと主張したい。

また臨床医学における「診察」、「鑑別診断」、最後の「診断」にも通じる科学の原点である。

マクロ解剖にノイエスなしといわれて久しいが、13回にのぼる企画、マクロ解剖夏期セミナー（新潟）では全国の若手解剖学者、大学院生、多くの医学部歯学部学生、加えてコメディカル分野からの参加があり、その意義と重要性を再認識すべく熱い実習と検討を行った。

チーム医療、インフォームドコンセント（説明と同意）、健康と医療問題への一般社会での意識の高まりなどを通して“解剖学”がドンドン一般の人々の中へも、ルネッサンスの波のように広がりつつあることを喜んでいる。

ダーウィンの言葉“No one could be a good observer, unless he was an active theoriser”は「帰納法」、「川喜田二郎の野外科学、KJ法」にも通じる重要、有効な考え方で、われわれの目指す、単なる羅列、暗記ではない「考える解剖学」に一致する重要な指針といえる。



最初に、使用の栄に浴した、改装となった解剖学実習室、2006年

新潟大学定年退職にあたり

■大学院医歯学総合研究科教授
本間　信治

私の学生時代には、まだ、羽織袴で講義をされる教授もおられ、生理学講堂には、カイザー髭をたくわえた、歴代の生理学教授の写真が、掲げられていた。私は卒業後、1年のインターンを経て、すぐに第一生理学教室の助手として、神経科学の研究ができ、幸運であった。助手の籍は、他の教室に貸し与えていたものを返却してもらったもので、悠長な時代であった。3-4代もの教授の研究を支えてきた3人のベテラン技官がいて、実験、生理学講義の動物実験供覧、スライド,文献の写真複写、雑用なども手助けしていた。1-2教室単位で、桜の木や池のある中庭があり、花見ができ、実験材料の蟇ガエルも放し飼いで、木造ではあったが、まさにDepartmentであって、現在のように全教室が一つのApartmentに同居していなかった。そんな環境でのんびりと、新潟ペースで研究できた。その後、東京医科歯科大学（1年）、セントルイスのワシントン大学（3年）、富山医科薬科大学（7年）、生理学研究所（共同研究、2年）などで研究、教育に従事、1984年、母校教授に召還され定年を迎えることになった。前任教授や、恩師の一人は、在職在任中に亡くなられたことを思うと、幸いであった。母校に戻り、いつ寝首をかっ切られるかわからないような状況はなくなったが、苦渋の末、神経科学の多くの恩師らの研究主題と異なる、胃電図（消化管の皮膚表面上からの電気現象）、胃電図マップ、ストレスと胃電図の研究にたどりつき、ストレスの胃電図反応の中枢神経系機序という、神経科学研究に回帰するところで、定年を迎えてしまった。定年最後の2-3年は、独立法人化、校舎改修に見舞われた。医学部もDepartmentから、大講座制のApartmentになり、基礎医学講座は削減を余儀なくされている。私が、担当する生理学第二講座は、戦後間もない、1954年に開講されたが、わずか50年あまりで幕をひこうとしている。現在の政治経済文教状況は、当時より悪いということであろう。しかし、大部分は、いわば、よき時代に研究、教育ができたことに感謝したい。

新潟大学を退任するにあたって

■大学院医歯学総合研究科
（附属腎研究施設）教授
清水　不二雄

あっという間の25年余。新潟での生活が今迄で一番長くなっている。

当然色々辛く自責の念にかられることも多かったが、間違いなく概ね恵まれたものだったといえる。7年前になるが、当時の荒川正昭学長のご厚情で副学長という思いもかけない要職につけていただけ、本務は想定どおり荷が重すぎたが、他学部の魅力溢れる要人とお付き合いできたことも含めてかけがえのない経験をさせていただけたことを心から感謝している。肝腎の研究面でも良き同僚に恵まれて専門分野についての国際シンポジウムを新潟で開催できたことが一番嬉しく自分には出来すぎのエピソードであった。全学のオーケストラの団長時代には積年の念願事項であった東京

副学長当時　本人は左側

新潟大学への想い
～旅立ちの日に～

公演をサントリーホールという天下の桧舞台で実現できた。

英語で“卒業”を意味するCommencementはまた“始まり”を意味するということが良く引き合いに出されるが、新潟大学で培い新潟大学から頂いたエネルギーを元手にして新しい可能性を追求していきたいと念じている。ドジが多く老害をまきちらしつつある現状を鑑みると、成る程定年退職は必要で何とか曲がりなりにもその日にたどり着くことが出来れば、それはもう間違いなくおめでたいことなのだと実感している。それを可能にして下さったすべての方々に心から感謝し、第2の母校である新潟大学の益々のご発展を衷心より祈念してお別れのご挨拶にかえたい。本当に長い間有難うございました。

医歯学総合研究科の退職にあたり

■大学院医歯学総合研究科教授
河野　正司

平成5年3月に新潟大学歯学部歯科補綴学第一講座へ赴任し、大学院部局化により講座の名前は大学院医歯学総合研究科摂食機能再建学分野と変わりましたが、本年3月をもって医歯学総合研究科の教授を定年退職となるまで、13年間にわたり大変にお世話になりました。

新潟大学における最初の6年間は、それまでに暖めてきたテーマを中心に研究と教育とに専念し、多才な教室員と楽しい毎日と送らせていただきました。咀嚼や発語などの顎機能が滑らかに行える義歯を患者さんの口腔内に装着できるようにと、顎運動を中心とした顎機能と全身の運動機能との関係について追求してきました。

次の4年間はそれまでの仕事に加えて、歯学部附属病院長としてその存在を地域社会に発信する仕事に携わり、続いて医病との統合という波の中でいかに歯科のアイデンティティを確立するかに腐心する毎日でした。このような改革の中で、その後の3年間は副学長として全学の運営という大変に重い仕事をさせていただきました。

この様な13年間につねに大学院生を中心とした多くの教室員の方々と研究活動を続けられたことが、私の「青春の終焉」を今日まで延ばすことが出来たのだと感じています。

無事仕事をやり終えることが出来ましたのは、歯学部の教職員の皆様、とりわけ摂食機能再建学分野（旧第一補綴）の先生方を初めとする、新潟大学の諸先生方による種々なお支えをいただけたからであり、深謝申し上げます。

法人化3年目に入る新潟大学がその存在意義を社会の中で高めて、さらに発展出来ますように祈念申し上げます。

定年一年前の誕生日に　医局にて

来し方を振り返って

■脳研究所教授
田中　隆一

私が昭和40年に本学を卒業して脳神経外科学を専攻してから40年、教室の責任者になってからは25年という長い歳月が流れました。今振り返ると、あっという間に過ぎ去った感があります。毎年、脳神経外科医を目指す若い教室員を迎えることができ、私自身が彼らの若さとエネルギーに鼓舞されつつ過ごした25年間でもありました。脳神経外科学はこの40年の間に顕微鏡手術、CT、MRI、脳血管内手術の導入など、それまでの脳神経外科の診療を一変させる技術革新が相次ぎ、われわれはそのたびに生涯学習を強いられましたが、その進歩の素晴らしさを実感し、メリットを享受することもできました。

大学の臨床教室には、高度医療の実践、学生教育と専門医の育成、臨床に還元される研究などが求められます。若い人達には、患者さんの立場に立って診療すること、得意分野や技を持った専門医になること、臨床上の問題を解決するための研究をすることを目指してもらいました。忙しい診療の合間に研究を進める難しさをいつも痛感していましたが、幸い意欲的な教室員に恵まれ、また学内外の多くの方々のご指導を得て、脳腫瘍や脳血管障害を中心にいろいろな研究を行うことができました。

定年を迎えるにあたり、これまで私を育ててくれた新潟大学の発展をお祈りするとともに、ご指導いただいたすべての方々に深く感謝申し上げます。